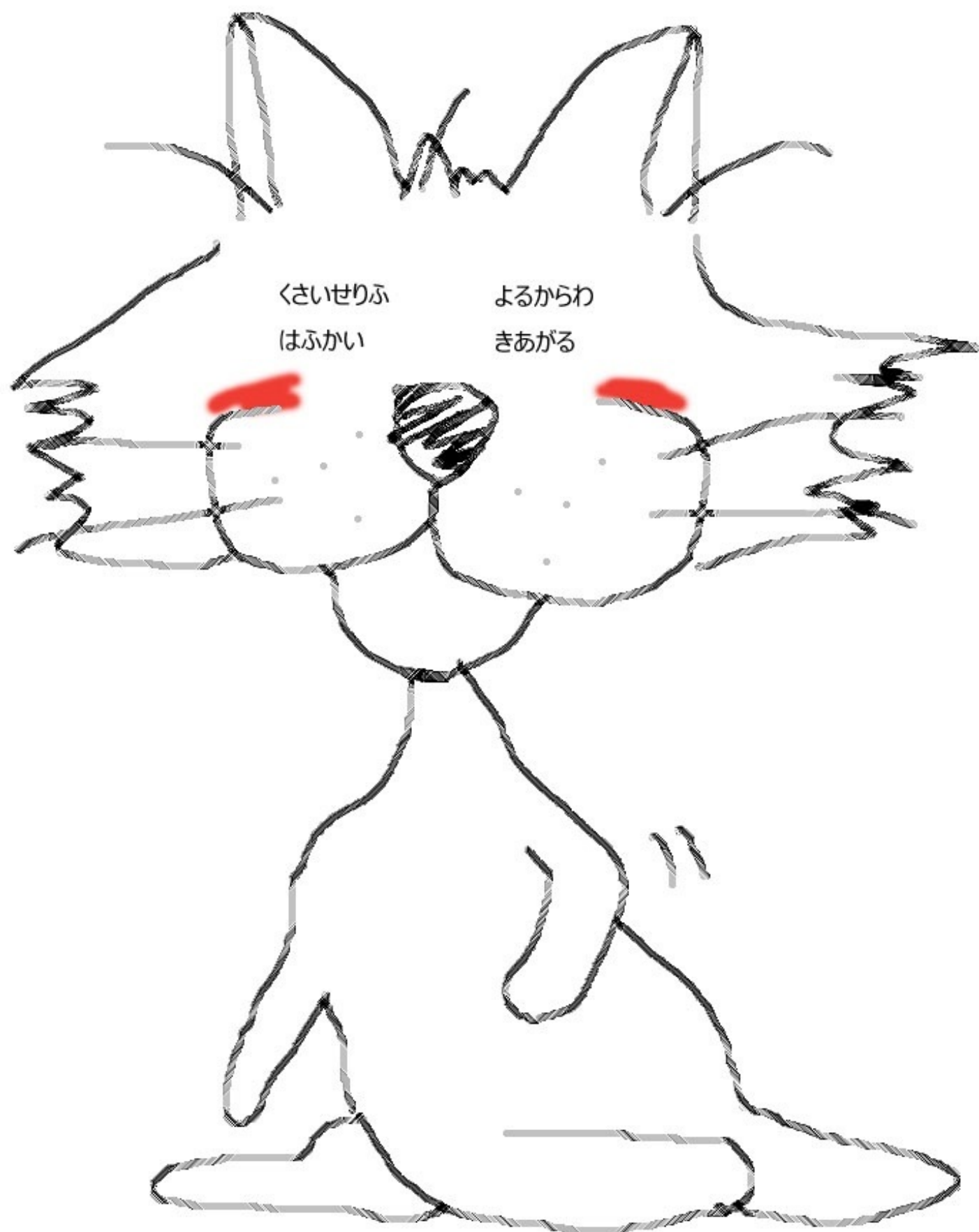




くさいせりふ
はふかい

よるからわ
きあがる

ネコと遭遇

昼過ぎにバイトがある。

こりゃまいった。

万年床で朝方からぐずぐずしてたら、もう昼だ。

これはきっとラジオ体操と暑苦しいセミの鳴き声のせいだ。

今日はそいつを悪者にしながら、いそいそ汚いスニーカーを履く。

玄関を出て、だらだら狭い通路を歩いて行く。

ところが途端に問題が発生した。

ネコとばったりはちあわせ。

こっちの動きがピタリと止まり、相手もつられてピタリと止まる。

ついでに時間もピタリ止まる。

みょ～な緊張が一人と一匹に駆け抜けている。

ど、どうしよう・・・。

「にゃあ」

ネコはそれだけ言い残すと、ゆったりした足取りで道を開けた。

なんだかとっても疲れたので、今日のバイトはお休み。

ドッグ・イヤー

ドッグ・イヤー

犬と遊ぶと

犬があんなに喜んでいる。

もうこっちに飛びかかってきて

前足を突き出してうお〜とやってくる。

かと思うとどろんこをバチャンバチャンと走り回り

舌をはみ出しながら豆粒になるまで遠くに行き

猛烈な笑顔と勢いでこっちに向かってやって来たり。

なんなんだ、おまえは。

僕があんなに喜んだことは

生まれてこのかたあったらろうか？

そんな考えを吹き飛ばすように

犬は全速力で走る。

人間より短い人生の道を

喜びで埋め尽くしながら。

犬の王様、猫の王様

犬の王様、猫の王様

年老いた

犬の王様は

ある日

ぷいと居なくなりました。

その夜、

犬達は真っ青な月を見上げて

こらえきれずに悲しい遠吠えをしたそうです。

きっと

去った王様を

惜しんでいるのでしょう。

年老いた

猫の王様は

ある日

ぷいと居なくなりました。

それでも

猫達は一瞬空を見上げたかと思うと

鼻をヒクリと動かして

何事も無かったように生活しています。

きっと

去った王様を

そっとしておいてあげたかったのでしょうね。

めまい

めまい

ふと気がつくと
とっても風が強い日で
草むらがぼおぼおと騒いでて
そうかと思うと傾いて
髪を逆立てぶるぶると震えてる。

雲は優雅に蒼の中
唸りをたてて飛ばされる
僕はやたらと風にやられ
たなびく体に身をまかせてた。

ポケットから手を出して
さあ、風を全身に受けよう。
たなびく旗が如く

そして
これは心地よいめまいだ。
めまいは分るかな？
風は僕の体をぐるぐる回し
僕は風にぐるぐると回されて
それはめまいに似ているな
くらくらと
くらくらと。

太陽と生意気なイヌ。

太陽と生意気なイヌ。

波が寝息を立てるよう
ごろりとなった犬と呼ばれるこの俺様は
夏にはうざすぎるロンゲをまとめて
ストップウォッチのような呼吸を繰り返す。

さすがに昼時ともなると
砂浜がこんちきしょう！って叫びながら
どこもかしこも狂ったように焼けていき
俺様の肉球が優雅に踏みしめることは
出来なくなってしまうけど

見ろよ
この夕日の沈んでいく光景を
もしあの太陽が沈みきったら
この世が無くなってしまふよなんて言われたら
それならそれも潔し！と叫ぶだろう。
いや、死ぬのはちょっとやだな・・・

俺様は自分の人生を
あの太陽のように激しく燃やしているか？
それを考えるのは
恐ろしい、恐ろしい・・・

太陽は躊躇するように
横にひらぺったくなりながら
徐々にその姿を波にうずめていくけれど
ヤツは今日を精一杯燃やしつづけ
きっと今は満足してるだろう。
そう思わないか？な？

つぶらな瞳で俺を見つめるダックスフント。

ああ、何が言いたいかわかっているとも。
めしだろ？

花

花

病気がちの僕に
私より先に死んじゃだめよって
耳元でやさしく言った。

だから僕は
出来るだけ健康的に生活をして
彼女を長い間安心させようと心に決めたんだ。

そして柄にも無く
きれいな花の種を植えてていねいに育て
彼女に毎年プレゼントしていった。

彼女はその花を見るたびに
僕にこう言うんだ。
私より先に死んじゃだめよってね。

僕は何年も何年も健康的に生活して
彼女の約束を大切にしてきた。

そして、彼女も僕ももういい年だね。
柄にも無く
僕は彼女のベッドの横の花瓶に花を入れて

君の約束は守ったよ。

そう言って、彼女の冷たい手をぎゅっと握って
朝も夜も枯れるまで泣いた。

蛍光灯

蛍光灯

ボクは天使。

今日、蛍光灯を替えようと思う。

替えるときは命がけだ。

すぽんと取り外すと

目がまったく見えなくなって

呼吸も出来なくなってしまいうらしい。

だからといって

取りかえるのをサボっていると

電極の部分が黒くなり

チカチカとし始めて

とても苦しい状態に陥るらしい。

それは・・・辛そうだ。

替えの蛍光灯を左手に持って

頭の上の蛍光灯をすっぽりと

抜き取って取りかえるだけ。

それぐらいはやりましょう。

だが僕はうっかりもので

あせって、ギュッと蛍光灯を

にぎってしまった。

砕けた蛍光灯の破片が

新しいほうの蛍光灯に降り注ぎ

そっちも元気に割れてしまう。

うわ！

苦しい、何も見えない・・・苦しい・・・

も、もうちょっとで呼吸が出来る・・・！

僕はたまらず声をあげて泣いた。

その声の隙間からこんな言葉が交わされる。

「元気な赤ん坊ですよ」

「まあ、顔がおっちょこちょいの主人にうりふたつね。」

ラパン

どうにもお腹がすいちゃって
こいつは何だか困ったな。
おもわず飛び込む「アリスのレストラン」
中じゃバンジョーがうなってて
僕の目玉もぐるぐるしてる、ああ。

サラリーマンにはランチが似合う。
僕も思考を1mmも使わない
日替わりランチでばっちり決めよう。

ウサギがオーダー取りに来て
鼻を盛んに動かしてまくって
「何にします」ときたもんだ。

サラリーマンにはランチが似合う。
僕も思考を1mmも使わない
日替わりランチでばっちり決めよう。

ウサギは時計を気にしてて
汗を盛んに出していたけど
決心したよにこう言った。

「ランチは、ちょっと、今の時間
なんだか、どうにも、出来ません。」

僕はとっても恥ずかしく
それはとってもいだだしくて
しょうがないから取り乱してしまう。

「ラパンだラパンだ！ラパンをよこせ！」

ウサギはボロボロ泣きながら
厨房方面に逃げ去って

そのうち出てきた店の主人。

彼も何故だか泣いている。

「ラパン（ウサギ）のワインソースでございます。」

皿にはでっかいウサギの肉と
にんじんで作られたウサギの耳だ。

僕はとっても怖くなり
おかげですっかり毛が生えて
耳もすっかり伸びている。

店の主人は喜んで
うほほい、ほほいと僕を追う。
お店の奥へ奥へ奥へ鍋の中へ。
暗い暗い暗い暗い・・・。

「ラパンだラパンだ！ラパンをよこせ！」

ピカ！
丸まった僕は良い匂い。
ニンジンで作られたウサギの耳を身体に巻いて
僕はニッコリ微笑んだ。

犬

犬

月の光に照らされて
キミが冷たいコンクリの上
せつない目で遠くを見ているね。
そうかと思うと、頭をうなだれて哲学者並みの皺を寄せてるし。

誰もいない
そこはキミだけの世界。
キミはその場所の王様なのに
あたりに漂うせつなさに押さえつけられているような。

・ ・ しょうがないな。
いっちょう励ましてやっか！

ボクが近づいていったら
もう、
顔をめちゃくちゃになめまわして
ちょっとおしっこをもらしちゃったり
ちぎれるほどしっぽを振ったりするので
ボクは
たまらなくとってもウレシクなって
負けずにクチャクチャと体中を撫でてあげた。

ああ、そうか
孤独だったのはボクだったんだなあ。

聞こえる、聞こえない

聞こえる、聞こえない

この都会で
彼と彼女は
しあわせに抱き合っている。

地鳴りのような自動車の音から
路面とタイヤがこすれる騒音

通勤電車の通過音がしたと思えば
緊急停止の非常ブザーの割れんばかりの音。

ドップラー効果のたっぷり効いたサイレンを散らしながら
野次馬の固まりに突っ込んでいく救急車

いつまでも続く工事の騒音や、酔っ払いの怒鳴り声
ガラスを割るような女の人の悲鳴・・・。

彼と彼女は
耳が聞こえないけど
互いの鼓動を聞きながら
とっもしあわせに抱き合っている。

勇者の剣

勇者の剣

私は
偉大な勇者だった老人に出会う。
彼は寝たきりだったが
これから冒険する上での知識や技術を
いろいろ与えてくれた。

それから
勇者の剣を譲り受け

「私を剣と共に冒険へと連れ出しておくれ」

彼はそれだけ言うと
幸せそうな寝顔のままこの世を去った。

私は剣を友として行動し
知りたいことを知り
やりたいことをやり
戦うべきを戦い
悔いなく冒険の中に生きている。

だが
やがて私は冒険を諦めるだろう。
腰は曲がり、顔は皺で覆われて
髪の毛は白くなっていて
剣を持つだけでブルブルと震えてしまう。

私というこの哀れな老人は
来る日も来る日も
ベッドの上で剣の手入れをしながら
大事な人を待っているのだ。

そして

若き勇者が寝たきりの老いぼれと出会うだろう。

彼の目は生き生きとしていて

かつての私を見るような感じだ。

私は勇者に

これまでの冒険で得た

ありったけの知識と技術を与えて

それから

私の冒険が染み込んだ剣を勇者に譲り渡すだろう。

「勇者よ

私を剣と共に冒険へと連れ出しておくれ」

ああ、こんな幸せがあるのだろうか。

これで私は

安心して眠りに就いて

勇者と共にふたたび旅に出よう。

遠足パワー炸裂

遠足パワー炸裂

さあ！

明日は！

え・ん・そ・くっ・・・遠足だ！

歯磨きだ！

パジャマに着替えだ！

鼻息は荒めだ！

トイレに行くのを忘れるな！

ベッドまでダッシュだ！

布団に潜り込んで電気が消えると闇の中。

ところが、

もう君の想像力は止まらないぞ！

闇の中に大活躍する風景がところ狭しと描かれて
興奮のるつぼにはばたいていく。

集合だ！

木登りだ！

みんなでお弁当だ！

自由行動だ！

坂を駆け上がれ！

もちろん鼻息は荒目だ！

すりむいた！

へっちらだ！

川に大きな石を投げ入れろ！

駆け足だ！

学校へ戻るぞ！

解散！

家路へとたどり着いたとき

とりあえずだけど、冒険は幕を閉じる。

ああ、眠くなってきたね。

おやすみ。

ベンチ

ベンチ

なんとなく
てくてく歩いて

ふと見ると
木陰に木製の古びたベンチがあって

そこに腰をかけて
ゆっくりと汗を拭いたりして

幾十ものそよ風が心地よく体に触れてきて

人はそこで幸せをかみしめるものさ、
そうでなくちゃ切なすぎる。

目的を持って歩いているときは
目的を見据えてたゆまなく進んでいるんだけど

ふと見ると
木陰に木製の古びたベンチが飛び込んできて

思わずそこに腰をかけて
大きな深呼吸を一服ついて

幾十ものそよ風に歓迎されたりして

人はそこで目的をベンチの傍らに置いて
何も考えずに青空を見上げてしまうものさ

そして
知らず知らずに

歩み出しているものなのさ。

マイブーム

マイブーム

むんふ～！もうがまんならない！

そんなわけで、どか～んと衝動買いをやらかした。

なんといってもこのザラザラとした感触でしょ？

いっぽんだけはみ出てる長い毛だし

リモコンなんだけど、有効範囲たった22cmというのが泣ける。

一応目が光るんだけどね、左右違う色になってんの。

スイッチがね、たしか、お？！取れてる？！

マニュアルもエイジア逆輸入な感じで日本語もめちゃくちゃ。

ほら、この部分だけはげててツルツルになっているし

ムキー！もうわけ分からんわ！って感じで・・・

あ～！・・・なんで俺こんなの買ったんだろう？

まあいいか、ここ押すとテトリンできるから。

ヨッタサンタ

サンタクロースはお父さんだって？
とんでもない！

やれやれ、近頃じゃ
夢の無い現実的な子どもが増えているってのに
まだサンタクロースをUFOや宇宙人のように
夢物語だと思っている人々がいるとは・・・
ほんと、嘆かわしいよ。

われわれは、クリスマスの終わった次の日から
すぐにおもちゃのリサーチを行って来た。
・・・何世紀も続けてきてるんぜ。
今も昔もマーケティングってのは重要だ。
せっかく贈ったプレゼントが翌日ごみ箱行きだ
なんて、たまないからな。悪夢だよ！

だがマーケティングだけじゃない。製造だって
やってるよ。

・・・昔は良かった。

なにせおもちゃの作りがちゃちかったからな。
作んのが楽だ。おれのようなブキツチョなやつ
でもどうにかなった。

工場の中はただただ大きくて、木材のにおいが
してた。その暖炉の横の薪木を貸してみろ。
そうそう、こんな匂いだよ。
あそこに行くといつもやさしい気分になれた。

1982年を過ぎたころから、LSIの工場を
建設したが、どうにもこうにもあの投資は失敗

といわざるを得なかったな。
おれは外からチップは買い付けるのがいいって
提案したんだがなあ・・・。

ヤなこと思い出しちまったな。

ああ、そうそう
君がこの酔っ払いの戯言を信じるか信じないか
そんなもの俺の知ったこっちゃない。
ただ、もっと現実的になってもらわないとな。

まったく・・・

サンタクロースはお父さんだって？
よしてくれよ！

うー。(^-^)

うー。(^-^)

彼女は
僕よりちょっとだけ早く起きて
ちょっとだけ古くなった食パンをとりだして
トーストを作ってくれます。
僕のは、真ん中の柔らかいところをつかって
タマゴとか、バターピーナツとか、タップリです。
彼女のはその余りの耳の部分で
タマゴとか、バターピーナツもちょっぴりです。
そしてこちらを見て微笑んでいるのです。

彼女は
僕の穴の開いたのくたくたした靴下を見て、
履き心地の良いおしゃれな靴下を買ってくれます。
やっぱり5足で1000円じゃダメだねえって言ったら
具合が良かったら、こんどはタップリ買ってくるね、
なんてこちらを見て微笑んでいるのです。

彼女は
冬の寒い日には、僕の寒そうなカッコを心配して
自分のしていたマフラーを僕の首にくるっと巻いてくれて
それはとっても暖かくて、彼女のいい匂いがしてます。
彼女は冷たい風にふるえながら
それでもこちらを見て微笑んでいてくれます。

僕はポケットをまさぐって
なにかプレゼントとか探したけれど
出て来るのはコンビニのレシートとキセルしたときの切符だけ。
まいったなあ。
そこで僕は疲れた彼女の肩コリをほぐすことにしました。
彼女の肩をぐいぐい押したりしてみます。

「・・・うー。(^-^)」

気持ちよさそうな声が聞こえたので

僕はとても幸せになりました。

そしてもうニコリするのは時間の問題なのです。

風

風

五月晴れ

サンシャインビルのお昼休みに
僕のネクタイは巻き上げられた。

さあ、

風が吹いたら思い出せ。

この風は、

僕が高校の時に抜けるような青空からやって来た
夕暮れの公園でぼんやりしていた時に現れた
チャリを走らせていた時に一緒だった
外で迷子だったとき吹いて来た

時代を超えてやって来た君に

深呼吸をして

それから「久しぶり」と挨拶をした。

君は通り過ぎた。

僕は背広を正して、僕の道に行く。

旅立つ日

旅立つ日

僕がここから旅立つ前に、僕は自分の墓に立ち
「なかなか楽しかったな」と思い出し笑いを出来るだろうか。

僕がここから旅立つ前に、親しい友に会いに行った時
「なかなか楽しいやつだったな」と思い出し笑いしてくれるだろうか。

僕がここから旅立つ前に、愛する人は涙を拭いて
「楽しい思い出をありがとう」と思い出して笑ってくれるのだろうか。

僕がここから旅立って、昔旅立った尊い人達に
「よくがんばった。おめでとう。」と祝福されるのだろうか。

それは分からない、
それは分からない、けど、
旅立ちの日がやって来るまでは、
僕は僕が後悔しないように一瞬一瞬を思い通り歩いて行こうと思う。

ペンギンライブ

くんくんくん。
さかなくさい。
なんだろう？
振り向いた。
え？！ペンギン？！
こっち見てる。
まいったなあ・・・。
瞳がつぶらだ。
無視しよう。
手を捕まれた。
振り向いたら
まだ見てる。
どういうこと？
腹の虫がぐう。
魚屋の前、
そういうことか。
えらっしゃい！！
手もみの魚屋オヤジ。
声がでかい。
タイミングもいい。
お薦めはさんま。
ペンギン首を振る。
さんまは嫌いらしい。
アジをいっぱい
足りないらしい。
アジを3匹
あ～！俺の血の生活費が・・・
むしゃむしゃむしゃ
ゲップもさかなくさい。
どうやら釈放。
へっ？ヒトデかこれ？
こんなんを渡されてもなあ・・・
ペンギンは去ってゆく。

俺も去ってゆく。

俺、給料日前だけど

俺、がんばれ。

ペンギンもがんばれ。

魚屋のオヤジもがんばれ、

にっぽんもがんばれ。

ヒトデはペンギンの通貨。

らしい。

ふたりぼっち

ふたりぼっち

ふたりぼっちがやっぱりいいよ。

君とこたつでぼんやりしてて

ふとこんなことをつぶやいただろ？

「ぼんやりしてる間にも私は老いていくのね。」

でもさ

「ふたりぼっちなら、ぼんやりもいいんじゃない？」

そうって

君の手をとって引き寄せたら

うれしそうにニャアと鳴いた。

ふたりぼっちでよかった。

皺（しわ）

僕のお父さんは、とても昔のことです、
お酒を飲むといつも家族のものに暴力をふるっていました。
ほんとに昔のことです。
お母さんはボロボロの雑巾のようでした。

子供のころ、
荒れ果てた部屋とボロ雑巾のお母さんを見て、
とても怖かったのを覚えています。

家族がお父さんから逃げ出してから、
とても永い時間が流れていきました。

お母さんはいろいろなパートをしたりして大変苦勞をしてました。
でも、決して弱音を吐かなかったです。
今は再婚して、とても幸せに暮らしています。

それどころか僕も結婚して、子供ができて、大きくなっています。
今年の信濃の雪が少なくなったころには小学校の入学式があります。

そう、とても永い時間が流れていたんですね。

そして

お父さんが、今、目の前でうずくまって泣いています。

ごつい汚い工事現場のジャンパーを着た、白髪に赤黒い顔のお父さんは
苦勞で出来たしわを顔いっぱいにくしゃくしゃにして。

ただただ泣いているのです。

でも、僕には何をすることも・・立ちすくんでいるだけでした。
金縛りにあったように身動きがとれません。

しばらくすると、お父さんは

よろよろと弱々しく立ち上がり、顔をくしゃくしゃにしたまま
僕に深くお辞儀をすると立ち去っていきました。

目の前に泥だらけのヘルメットが落ちています。
僕も泣きました。

おまけ

おまけ

僕は50円玉と15円を持っていて
彼女は100円玉と23円を持っていて
お腹が空いてたから
二人のお金をあわせて
菓子パンとちびっこの牛乳パックを買って
公園のベンチでうららかな春に
1つの菓子パンを2つに割って
彼女にはクリームが多く入っている方を渡して
ぽかぽかな日に当たりながら
もぐもぐと食べました。

心地がよい日差しの中
薄汚い僕と
薄汚い彼女は
残り少ない牛乳をストローでじゅるじゅる吸って
「もうなくなっちゃったね」って彼女が言ったら
僕のおなかはぐうとなって
思わず顔を見合わせて、笑い出しました。

菓子パンと牛乳パックに
幸せのおまけがついてたのかな？

いまはしあわせ。

いまはしあわせ。

実は、仕事で失敗しちゃってね
とぼとぼと吉祥寺の街を歩いていたんだ。
でもね、気が付いたら
素敵なウッドベースやアコースティックギターの音が
楽しそうに生演奏しているじゃないか。
だから、いまはしあわせなんだ。

先週の日曜日は、雨がこれでもかと降ってて
古びたアパートの中でうらめしく外を眺めたもんだった。
でもね、気付いたら
おしまいと思ってたダージリンティーパックが見つかって
もちろん一目散にお湯を沸かして、ゆったりしちゃったよ。
だから、しあわせだったね。

君と別れてもう1年もたってしまったのか。
あれから心にぽっかり穴が空いて、ずいぶん寒い思いもしたね。
でもね、気付いたんだ。
井の頭公園で何気なく動物を眺めていたり
昔好きだった映画をコーヒー付きで浸ってみたり
ちょっとしたことが僕をしあわせにしてくれるんだ。

どんなときにも
どんなところにも
しあわせは落ちているもんなんだね。
それに気付いたから
君に伝えたかったから
ここに書き記しておくことにするよ。

福引

僕んちのトイレに、福引がやってきたら
うんちのたびにグルリと回す。

ハズレの紙ならいいけれど、
1等だったらハワイ旅行。
おしりも拭かずに、さあ出発だ。

かくはんされる真っ暗な満員のバスの中。

狂った運転手がぐるぐる回す。残念ながら僕もまわる。
不意にハゲ頭の中年サラリーマンが外に投げ出された。
青い顔にもなるってもんだ。
誰かがハナをかんでいる。

狂った運転手がぐるぐる回す。有無を言わさず僕もまわる。
派手な赤系のOLが黄色い声で飛び出してった。
ヤケクソに鳴り渡る鳴り渡る、ベルの音。
そして誰かにハワイ旅行をプレゼント。

あのね～ちゃんが当たりだったのか。

冬の日曜、朝

冬の日曜、朝

朝、布団の中で目を覚ましたら
部屋の中がとっても静かでした。

それに

古い木造の窓から差している日差しは
まぶしく明るいというのに
部屋の中は凍えるほど寒くなっているのです。

すぐ横にいる彼女は
布団をぽっかりかぶりながらこちらをじっと見えています。
僕はうだうだと起き上がり
窓から溢れ出る景色に見にいきました。

そこには
雪が静寂を連れてたたずんでいました。
外が明るいのは彼らが光っていたからか・・・

その時ふいに寒くなったので
布団の中に飛び込んで、うだうだすることにしました。

もちろん
彼女に冷たくなった僕の手をひっつけるいたずらもね。

てくてく

てくてく

まだ若い頃にそこで君に出会った。
じゃあ、一緒に歩こうかってことになって
てくてくどんどん進んだもんだった。

お腹がすいたらコンビニでサンドイッチを買って食べたし
寒い日にはだぶだぶのコートにふたりでくるまったね。
たまには本気で喧嘩もやって、背中にキックをくらったなあ。

そんなこんなで歩いてきたので白髪も生える年になって
歩みもすっかりゆっくりになる。
そして君はしゃがんだまま帰らぬ人となってしまった。

私は・・・
てくてくと歩んで来た道を思い出と共に引き返す。
ひとり老人ホームの片隅で。

ただいま

ただいま

さよならと言われて、別れてしまった彼女。

道端でばったりはちあわせ。

なにかいおうとあたふたしてたら

彼女が「おかえり」と微笑んだ。

僕はひとときぼかんとしてて

気付いたら「ただいま」と笑みを漏らしてた。

話の方はこれでおしまい。

田舎

アコースティックギターの優しい音色が
ぼくのところに流れてる。

ぽっかり抜けた青空の下
すっかり刈られた田んぼの一本道を
ワンマンの錆びたプレートを軋ませて
秋の頸木野のまんまんなかを
王様バスはのんびりと進む。

ぽつねんと立ち尽くしていた
停留所にばあちゃんがうたた寝で
ネコもつられてうたた寝る。

王様は止まって
年齢に見合ったため息を2度ほどついて
ぼくを降ろしてばあちゃんを乗せた。

そして
上に落ちてぐるぐるしないように
停留所の棒にしっかりとつかまると
空を見上げてみるのでありました。

最終電車

最終電車

くたびれた僕は
そのがらんとした最終電車に
乗り込んだのです。

しばらくすると
ひょろりとした男の人が
乗り込んだのです。

発車がそろりと近づくと
くたびれたサラリーマン達が
乗り込んだのです。

ひょろりとした男の人は
携帯電話で話し始めました。
この人は
酔っばらっているのか
はたまた変な人なのか
同じことを何度も何度もゆっくりと
はなにかかった声で大きく話すのでした。

「やっぱりね、間に合ったから、帰ることにするよ。え？
か、え、る、こ、と、に、す、る・・・

僕は、うるさいなあ、まいったなあ、と思いました。
きっと、隣の女の人も、向かいに座っているおじさんも
そう思っているにちがいありませんでした。

「よお、にいちゃん、ちょっとうるさいんじゃないのか
いい加減にしろよ。」

近くのサラリーマンが恐い顔で言い放ちました。

すると

その男の人は、とても恐縮した感じでどもりながら
「す、すいません。相手の、み、耳が遠いので
ほんとに、す、すいません。」
と言いました。

僕は大人になってからしばらく経つというのに
本当に悪いのは
この人なのか、文句を言ったサラリーマンなのか、
耳の悪い電話の相手なのか、うるさいと思った僕なのか
全然分かりませんでした。

でも、みんなの心が痛んだのは確かだったのです。

ねえ、お茶を飲もうよ。

ねえ、お茶を飲もうよ。

もう、午後2時と半分たったし
日差しもすっかりぽかぽかだ。

ふにやりとしけたビスケットや
インスタントのコーヒーだって
喜んで僕らをほっとさせてくれるよ。

だから、ねえ、お茶でも飲んで
のんびりにぷかぷかするってのも
いいんじゃないかなあ。

雨宿り

雨宿り

切なくなるほど疲れたので
雨宿りをしました。

あめのしずくがしとしとおちて
さびた金具の匂いがします。

地面を叩く雨音は
静寂たちが散りばめられて
眠りに入る狭間のように
とても心地がいいですね。

いまは、晴れない事を祈りましょう。

ダニパンチ

掃除機にさりげなく「ダニパンチ」の文字。

ボクサーが腹筋。

ボクサーが減量。

ボクサーがスパーリング。

ボクサーがなわとび。

そして

ボクサーがダニにカウンター。

止める奴はいなかったのか？

なにげない

なにげない

なにげない言葉が風に飛ばされる。

なにげない時間が風に溶けてゆく。

もし辛くなったら

ふりかえってみなよ。

数え切れないほどのなにげないものが

きみを支えているんだから。

はるらん

はるらん

ぽかぽかいっぱいあびていこう。
そらにむかってのびまくろう。
しばふでころげてめをまわそう。
ダッシュでかいだんかけあがろう。

はるらんまんをつかみどり。
ほんきにならなきゃそんするよ。

みずたまりのうえジャンプしよう。
かのじょにてがみもかいてみよう。
しらないろじをたんけんしよう。
ウクレレぽろぽろひきまくろう。

はるらんやまほどとりほうだい。
いまうかれなきゃ、ぜったいぜったいそんするよ。

あとはどうする？
ごろりとねむっていいゆめみるさ。

うつらうつらと

うつらうつらと

真っ白から緑色へ。

大きな木に倒れている。

森の匂いが鼻を刺す。

どこからか、スカボロフェアを歌う女の子の優しい声がする。

ふっと、顔を上げると、テレビＣＦから流れているさっきの歌。

仕事から帰って疲れて、テレビの前で倒れたんだったっけ？

外は暗黒。そして静寂。

さみしさが痛くなって目をつぶると誰かが肩を叩く。

目が醒めた。

よかったキミがいて。

出口

出口

森の中をゆっくりと歩いている。

濃い緑に白い靄がどこまでもどこまでも上に伸びている。

空気を吸い込むと、ひんやりとした朝露の破片が肺に気持ち良く突き刺さる。

大きな木が優しい風に揺られて葉を鳴らしているし

とめどなく流れている川のせせらぎが遠くの方で囁いているので

耳をすまさずにはいられない。

こんな素敵なことを体験したら

ひとはもっと独りぼっちが好きになっているだろうね。

そんなことを思いながら森を抜けて行く。

そして出口。

今日も排気ガスや無言の満員電車、人々の足音などでまみれている

孤独な1日を迎える。

直線的な日々

朝7時12分。ボクは睡魔を追い払いながらむくむくと起きだす。
そのへんにあったパンをむさぼって、インスタントのコーヒーをすする。
ぼやぼやと歯をみがき、切れ味の悪いシェーバーでメンド臭そうに髭を剃る。
剃り残しがみっともないまま、ふとこんなことを考える。
さて・・・ボクのまわりにはなにがおこるんだろうってね。
それには答えを出さずに、とりあえず会社へ向かうことにした。
いつもの仕事をいつものようにこなしてゆく変化の無い日々。
逃れるように電車で飛び乗り、無言まま大都市を離れてゆく。
駅を降りたら、途中にあるコンビニで食べ飽きてる弁当と雑誌を買ってく。
アパートまではあと少し・・・
バリバリと弁当に絡み付いたビニールをはぎとっていく。
お茶のパックを1つ取り出して、渋くならないようほどほどつけた。
そしてテレビのスイッチを入れる、さりげのないしぐさのように・・・
テレビの中で、ある人々は血を流して倒れ、ある人々は死んでゆく。
ある人は物事に対して批判して、ある人はそれに相づちをうっている。
ある所では、祭りで賑わっていて、ある所では戦争で賑わっている。
そして集会があって、災害があって、野球があって、裁判もあって・・・
ため息をついて、なんと世の中にはいろいろなことが起こってるのだろう。
そんなことを思いつつ、チャンネルを次から次へ変えてゆく。
そんなとき、ふとこんなことを考える。
さて・・・ボクのまわりにはなにがおこったんだろうってね。
それには答えを出さずに、とりあえず明日まで眠ることにするよ。
きみは、どうだい？

片思いの彼女といっしょ。

てくてくとかえりのみちをあるいてる。

ぼくのあたまのまわりでは、理性の天使と欲望の悪魔が激論中。

彼女のとりとめのないはなしもついつい聞き逃してしまう。

彼女とふたりいっしょにいと

いつもやつらが現れて、ぼくの思考をでっかい棒でかき回す。

ま、そんなことにはお構いなしに

彼女のとりとめのないはなしは続いて行くんだけどね。

おや？

気付くと彼女は天使をつまみあげ、ぽいと遠くへ投げちゃった。

もちろん僕は、悪魔の言うとおりに彼女に甘いキスをすることにする。